

長田 新の宗教教育論

—— F.Fröbel 教育論を中心に ——

酒 井 玲 子

目 次

1. Pestalozzi, 宗教教育論の受容
2. Fröbel, 宗教的理想主義教育論
3. 自己活動の本質
4. 教育敬と幼児教育
5. Fröbel 研究の意義

研究の視点

1) 主として西洋哲学史, 教育哲学, Pestalozzi 教育学専門の長田新^{おき だあらた}は, また, 宗教・道徳教育論の碩学とも言える。長田は自らを「既製の宗教を有たない一人の自由思想家⁽¹⁾」と称するが, 宗教と道徳に関する長田の内的関心は長田教育学の各著作を貫く視点である。それは, とりわけ『道徳及宗教教育の本質』(大正 14)と『宗教と教育』(1954)に長田の宗教教育論として集約されている。

戦後制定された「教育基本法」は, 主権在民と民主主義を基調にして人類の平和と福祉に貢献する個性豊かな文化の創造者の形成を理想としている。長田はその教育基本法の「前文」解説において, I.Kant 等を引用し, 道徳を実践躬行する主体の人格の絶対尊厳性について言及している⁽²⁾。また, 「平和教育は真の道徳教育⁽³⁾」との『原爆の子』に込められた信念は, 長年に渡る教育思想史研究と自らの被爆体験を鑑みるとその結論の重みは計り知れない。

この「教育基本法」第 9 条には「宗教教育」の項があり, 政教分離の原則の上で, 「宗教に関する寛容な態度及宗教の社会生活における地位は, 教育上これを尊重されなければならない」と定めている。これは戦

前の国家神道が個人の人格の尊厳と信教の自由と抵触したことの反省から宗教者、無宗教者の相互尊重の原則を提示したものである。

しかし、道徳教育の特設、「期待される人間像」の提示などに見られる国の「心の教育」政策にもかかわらず、昨今の学校、地域社会、家庭における子供、生徒を巡る深刻な問題状況を考慮すると、戦後の教育に最も欠けるものは人間の生き方の本質を問う教育の欠如を感得せざるをえない。

2) 長田は、人間は歴史によって作られるのみならず、歴史を作る存在であることを強調したが、今日の憂慮すべき教育について、鋭意その根本問題点を指摘している。その一つは表皮的な知育の偏重はあっても、真の知育は欠如している点を指摘し、その根底を貫くべきは、愛、信頼、感謝など宗教等によって培われるべき精神の陶冶であることを主張した。

本稿では、宗教一般に共通する人間精神の啓培は、現教育の課題であるとの視点に立って、第一に、長田新畢生の教育学研究である Pestalozzi 宗教教育論を押さえつつ、第二に、それとの繋がりて Fröbel の児童神性論等の宗教教育論を探り、終わりに、それらの研究が我が国の Fröbel 受容史研究に如何なる意味を持つかを探りたい。

1. Pestalozzi, 宗教教育論の受容

1) 全体系の要石としての宗教教育

『道徳及宗教教育の本質』は長田の最初の宗教教育論であり、J.H.Pestalozzi の宗教教育論と思想を解説し、末尾に「ゲルトルートは如何にして其子を教ゆるか」第 13, 14 信の翻訳を掲載している。

そこで長田が究明しているのは、Pestalozzi 思想の全体系の要石（かなめいし）が宗教教育の問題にあり、「神の礼拜の本質が人類の発展を顧慮して私が一般に真なりと認めた原理と如何様⁽⁴⁾に関係するか」を最大の関心事とした Pestalozzi への共感にあると考える。何故なら Pestalozzi の指摘するように、宗教教育が人間教育の基礎であり、しかも宗教は、真理、道徳、芸術等の諸価値と併立するもう一つの価値ではなく、それらを成立せしめる諸価値の共通の基礎、最後の原理とすることに重点を

置いているからである。

そこで長田はその諸価値の根底について、E.Spranger の宗教論を用いてさらに言及している。それは、個々の存在、個別化された価値の体験を、一つの総体価値に関係させるものを宗教的態度としており、その総体価値とは最高の価値一般を意味していると説いていく。そうした文脈の上に、宗教は真理、道徳、芸術を靈化する普遍価値であって、真理を希求することは本来永遠なるものへの憧憬であり、道徳的精進は実践の世界において永遠なるものを憧憬する事なのである。その意味で長田は宗教教育は Pestalozzi, Spranger の線上で教育全体系の要石的存在であると位置づけられるのである。

さらに長田は、『ナトルプにおけるペスタロッチの新生』において、P. Natorp の宗教教育論を展開しているが、ここでは Kant と Pestalozzi の一致について触れている。その一致とは、「吾らの裡なる法則、即ち神の法則⁽⁵⁾」に立ち、「宗教の根源に深く喰い入って、その人間本質観を捕らえ来つた⁽⁶⁾」ことにあったと見ている。

長田の宗教教育観はこうした一連のドイツ的な人間探求思想の系譜の究明から得たと考えられる。これらドイツ思想については、2 においてさらに追究したい。

2) 内在する神

「如何にして神の概念が私の霊の内に胚胎したか」、と Pestalozzi は問う。神の問題の根拠を Pestalozzi は自らの内に求める。神を信ずるとは自己が自己を信じることである。その意味で『隠者の夕暮』の「神は人類の最も近き関係」(Gott ist die nächste Beziehung der Menschheit⁽⁷⁾)なのである。それは、感性的に、自然的に最も近い関係ではないが、内面の中心的な精神的な関係において最も近い存在なのである⁽⁸⁾。すなわち、神とは「我が本質の奥底に於ける神」であり、『ゲルトルート』において、彼が「私は私の心情の神の外には、如何なる神も知らない」と言っている通りである⁽⁹⁾。

Pestalozzi は『リーन्हアルトとゲルトロード』において、「人間はただ人間即ち自己を知ることによってのみ神を知り、ただ自己を崇めることに依つてのみ神を崇める⁽¹⁰⁾」と述べている。

長田はこうした神の内存在説を Pestalozzi に限らず、Novaris の「神を見んとするものは汝自らを深く掘らなければならない」⁽¹²⁾や、Kant の「人は自らの内に沈潜することに依て、一切真理の源たる超個人的な普遍的なものの存在を知ることが出来る」⁽¹³⁾、などにも言及している。しかも長田はこれら神の存在と人間との関係を述べつつ、「Pestalozziこそは最も厳密なる意味に於いて『人間の宗教』を説いた宗教改革家であった」⁽¹⁴⁾と指摘している。

事実、Pestalozzi は、本性の内部に横たわる神への信仰こそが人類教育の基礎であるとの確信に満ちている。従って彼は、「われわれの存在の奥深いところから純粹に汲みとられた真理は、普遍的な人類の真理にちがいない」し、「それを引き出して育てることこそ、人類共通の願い」⁽¹⁵⁾であると訴える。ここには、人間、宗教、教育を相互に関係づけた Pestalozzi 教育論が簡潔に表現されてる。

重ねて言うと長田は、その Pestalozzi の神の内存在説を B.Spinoza の汎神論や J.Böhme の神人同一視の思想にまで逆上ってその共通性(同じではないが)を指摘している。例えば、それを Böhme の「天は到るところにあり、汝の立つところ、行くところ、皆天あり」⁽¹⁶⁾を引用し、むしろこうした汎神論的な思想に真実性を感得している。併せてこの神の内存在観は、新人文主義の共通した精神であると指摘する。

3) 母性と宗教意識

上記の長田の書から Pestalozzi の宗教意識の芽生えについて見てみたい。Pestalozzi は、まず、人間の宗教的態度の核心は神に対する愛と信頼と感謝と従順にあると規定したうえで、これらの態度は何時、如何なる時に人間の内面に芽生えるのであろうか、と問う。長田は、Pestalozzi の内面に沿ってその起こりの糸を辿って行く。

するとその態度や心情は身近かな人間の間に生起している。聖書の、「目の前の兄弟を愛さずして目に見えぬ神を愛することができようか」、が引用され、それを裏づける。さらにその段を突き詰めて行けばこれらの心情は幼き子供とその母親との関係から生じることに行き着く。

かくして出発点から見直すと、母との間で生じた愛と信頼と感謝と従順は次第に拡充されて、父、兄弟、姉妹、隣人、そして人類へと連続発

展し、ついに絶対実在者である神に向かって現れていくことになる。「人類の発展は感性的欲求の満足に対する烈しい欲望から発する。母の胸は感性的欲望の最初の嵐を鎮め、そして愛を生じ、その後間もなく恐怖と畏怖といふものが頭を出して来る。母の胸はその恐怖を鎮める。このやうな行動が愛と信頼との感情を融合させ、そして感謝の芽生を発達させる。」⁽¹⁷⁾

その場合の神は超越者、独断者ではなく、『隠者の夕暮』で指摘される人間に最も近い関係にある神となるのである。

やがて子供の内より発する自我の力が彼や彼女を母から離し、新世界に入ろうとする。その際のさまざまな危機に母は今までも増して次のように言わなくてはならない、と。

「お前が私を要らなくなる時、その時お前の欲しいものは神である。お前に幸福と喜悦とを貢ぐものは神なのである。」⁽¹⁸⁾

この論理的展開において長田は、『宗教と教育』において自我力の芽生えが神への信仰心へ繋がり、同時に道徳性へと発達させることを教授と教育の基礎と述べる。そして、この心情への進歩、発達は人間の高い術が必要であり、「汝の術の全体の力を傾けて感謝と愛と帰依と従順の感情とを子供の心の裡に純粋に維持しなくてはならない。神は此等の感情の中にある。そして汝の道徳的生命の全力は此等のものを維持することと密接に関係している」と説くのである。⁽¹⁹⁾

しかし、子供に与えられた新世界は利己と闘争、矛盾、暴力、驕慢、作偽、虚妄とに満ちた世界であって、神の「第一の創造の世界」ではない。この諸悪の源を堰止め、愛と感謝と帰依の感情を幼児の内に発展していること、神の事業を破壊せずに人類教育の原理に従わせること(術)が普遍的課題になるのである。

こうして長田による Pestalozzi 宗教教育論は、墮落した世界からこの第一の世界である本性的自然に還ることを訴える。つまり、それは Pestalozzi や、Rousseau の『エミール』教育論と一致し、その系譜にあると言える。

4) P.Natorp による Pestalozzi の再生

さらに、長田の Pestalozzi 観やその宗教教育論の論点は、以下のよう

な人物の思想に依存していると言える。

その一人は、Pestalozzi 教育学の再生を叫ぶ、新 Kant 学派の Natorp である。長田によれば、Natorp は、社会と人間の本質的な関係を核心として人間教化の課題を解き、さらにその根本概念を Kant 哲学をもって基礎づけた人間と見ている。その際、Kant の分析と Pestalozzi の総合をもって人間の本質に接近するとしても、両者ともに宗教の根源に深く分け入り、人間の本質観を捕らえる点に共通項を見いだしている。⁽²⁰⁾

しかも認識の中心点を自我とし、自我から物の理解と決定を見る立場が神理解に通じており、神は我らに最も近き関係であるとする見解に至らしめているのである。このようにして Natorp による Pestalozzi 理解は、長田によれば全てドイツの宗教と哲学とドイツ的精神の最内部より来て理想主義的の根本原理を作り上げたとするものである。

長田は、Natorp の著、『社会的理想主義』を挙げながら、生きた現実の生活と理想主義両者の必要論に注目している。そこでは、「天才は天より降りるものでもなく地より湧ものでもなく、ただ人間の本性を凝視するところに産る⁽²¹⁾」と述べて、Natorp が体験の教育者である Pestalozzi をその意味で称賛したとする。

実際、Natorp は、Pestalozzi を Platon に比し、Kant を越えた存在とさえ位置付ける。というのは、Pestalozzi が烈火の愛をもって人間を理解し、人格的融合を教育の根本と見たからである。長田は、Natorp の言葉を借りて、Pestalozzi の現代社会への再生によって、「世のこれ以上の墮落と潰滅とを救う⁽²²⁾」必要性を強調したのである。

2. Fröbel, 宗教的理想主義教育論

1) 『見童神性論』より

上記のような Pestalozzi 宗教教育観を継承した Fröbel は、またドイツ理想主義哲学、さらにその系統を引く浪漫主義の土壤に培われた思想家でもある。ここではまず多少 Spranger の Fröbel 宗教教育論についてふれておきたい。

彼によれば Fröbel にとっての問題は、専らドイツ的衣装をまとった宗教的、倫理的人間の理念の追及にあったとする。Fröbel は時によって

は政治的トーンが強調されることがあっても、基本的にはロマン主義者であり、自然神秘主義と霊的神秘主義者でなのである。あの象徴的解釈のなかに、「現象的な具体性を越えた自由な意味付与は人間にとって最高の精神的能力⁽²³⁾」を表している。Fröbel のロマン主義者たる所以は、一つの中心的な関係である「人間と神」への回帰にあり、その楽園をイメージしたものが Kindergarten である。そこは神の庭として予感され、人間の中にある神的なものの萌芽を育てることにある。つまり、Fröbel の中心的思想は生命の合一 (Lebenseinigung) であり、これに反して、生命が分離するとは神からの離反を意味するのである。以上がシュプランガーの Fröbel 論である。

さて、長田の Fröbel 観に戻りたい。その第一の特徴は、Spranger と同じ意味内容をもつ、宗教的理想主義者に Fröbel を位置付けたことである。

つまり、「ペスタロッチの達せる人間教化の理想的実在を獨逸理想主義の哲学に依て基礎づけたのがフレーベル⁽²⁴⁾である」。Fröbel を Pestalozzi の後継者、そしてその教育論を発展させた人間とする。しかし、一方では、全く独自の立場を拓いた人間⁽²⁵⁾との評価も与えている。それは、長田の Fröbel 教育観が、自らの西欧教育哲学史の研究結果から形成されたことにその主な理由がある。

まずその言わんとする根拠を長田の比較的初期の著作である『児童神性論』(大正 13) から探りたい。

この著の構成は三部からなり、1. フレーベルの教育説について 2. 児童神性論(『人間の教育』の基礎論、) 3. Die MENSCHENERZIEHUNG (独語原文) の掲載である。1. において長田は、フレーベル思想の時代背景を以下のように叙述している。

18 世紀後半、丁度 Fröbel の誕生時は、I.Kant が 1781 年に『純粹理性批判』を著すなど、ドイツ理想主義哲学の最高潮期にあたり、教育学の世紀でもあった。Kant は児童を「造物者」と見ていたが、長田によれば、その三大弟子とする F.Schelling, J.Fichte, G.Hegel はそれぞれに実在と精神、自然の関係を解き明かしたとする。

Schelling は、時間と空間、物質と運動、引力と光線、磁気と結晶、植物生活と動物生活は、「絶対存在の客観の極」であり、精神はその主観の

極とする。すなわち、実在は精神と自然との同一体であって、その中心点に神性を置く同一哲学を築いたのである。

しかし長田によれば、Fröbel の自己決定によって生活のうちに自己の本質を現す思想は、一層 Fichte に接近しているとも説く。この Fichte は人生に於いて善の実現と意志と努力を重視した人物であり、道徳的自我の完成を人間教育の目的としているからである。その意味で長田は、Fichte を「倫理的理想主義者」と呼び、人生における文学や芸術の意味を強調した点において、Schelling を「美的理想主義者」と呼んでいる。一方、Hegel は絶対をもって神的理性と考え、自然はこの神的理性が無限に多様な個体を創造する過程であると考えた。それ故長田は Hegel を「理性的理想主義者」と呼び、彼との対比で、Fröbel をいわゆる「宗教的理想主義者」に位置付けたのである。⁽²⁶⁾

その Fröbel は、Schelling の思想に心酔しつつ、しかも Hegel と同様に絶対神的なものを考え、一方 Fröbel が彼の妻を通じて感得したと見る、F.Schleiermacher の思惟と存在の同一視、精神と物質の統一観からも影響を受けたと見ている。

2) 永遠の理法と神性の顕現

長田によれば、以上のような自然哲学、あるいは浪漫主義哲学や思想をもその中に含め、あるいはその系統にある理想主義哲学の影響の下で Fröbel の思想は構築され、『人間の教育』の中に表現されたものと見ている。

その Fröbel 著、『人間の教育』の冒頭部分を長田は、自らの翻訳により、次のように凝縮し、簡素化して引用している。

「万物のうちには永遠の理法が生きてをりそして主宰している。この一切を支配する理性はその根源としてすべてに普ねき力を賦与する、自覚ある、そしてそれゆえにまた永遠なる統一を含む。この統一が神である。神からして万物は生じて来た。そして万物はただ神的統一を有する。万物のうちに生ける神的顕現こそ万物の本質である。自らの本質、自らの神的実在、従って神的統一そのものを現すこと、言いかへれば神を万物の外部的な現実的な存在のうちに啓はすことが万物の使命であり、また畢生の仕事である。」⁽²⁷⁾

これによって長田は、Fröbel の根本思想は、万物に永遠の法則が支配し、万物はこの神的なもので統一されており、人間の使命はこの神性の顕現にある、と端的に表現している⁽²⁸⁾。

このような『児童神性論』に見られる長田の Fröbel 教育観は、Fröbel 没後 100 年記念特集として編まれた『幼児の教育』誌上の論説に表されている。それは、「楕円の二個の中心点にも比すべきこの両極を同一哲学の立場に立って内面的に統一した」のが Fröbel である、という評価に集約されているように窺える。

Fröbel 教育観の核心を以上のように捉える長田は、Fröbel 教育学の難解という理由をもってその根本思想ではなく、幼稚園の業績を一切と考える当時の日本の幼児教育界に一矢を報いている。長田自身も、Fröbel 思想は、「難解であり神秘的であって、シュライエルマッヘルの思想同様常人の深く窺ふことを許さない⁽³⁰⁾」と認めてはいるが、しかしこれについても独自の見解を展開している。Fröbel は、「哲学的、思索の深遠に沈み行った」が故に、彼の人生観、世界観、教育思想を根深く培った⁽³¹⁾、と逆に高く評価するのである。

言わば、幼児期は人間教化の一段階で、「人間教育」こそ「権威ある永遠の教化思想であり、あらゆる段階に普遍的なもの」、と言うのが長田の論拠である。その Fröbel の理想主義があつてこそ、フランクフルトの模範学校やカイルハウ学園の実践や運営の「直接経験の結晶⁽³³⁾」を創造出来たという評価している。

そうした実績から鑑みて、Fröbel は決して夢想家などではなく、返って「飽くまで体験の教育者⁽³⁴⁾」であると強調するのである。以上のように、長田の Fröbel 人間形成論の根本の見究めが、その体験を意味する自己活動の理論に繋がっていく確かな筋道につながったと考える。

3. 自己活動の本質

1) Fröbel, 人間教育の根本

長田は Fröbel の教育論は、まず第一に神性の顕現が源にあるとする。すなわち、人間は自己の存在や本質を神性の法則に従って、啓示する存在であり、内に宿るその神性の本質である創造性こそ子どもの自己活動

の源泉と考えている。そして興味深いのは最初の教育としての感覚器官の鍛練は、その言葉のもつ意味から、「自発的内面化」(Selbsttätige Innerlich-Machung)⁽³⁵⁾と呼んでいるのである。

さて、Fröbel 自身が述べている自己活動に関する部分を『人間の教育』より探ってみよう。

人間は、自由と神性に向かって創造されており、自由な自己活動を要求し、かつ、前提としている存在である。それ故、「外見上粗野で、強情であったり、心が散漫に見える少年でも、自己の決断により、熱心な力強く善を実行しようとする活発で熱心な意欲や確固とした不動の思想は持ち合わせている」⁽³⁶⁾、と確信している。

これらの教育論はおそらく Fröbel が自伝で述べているように、彼自身の少年期の回想と重ね合わされているのであろう。

次に多少長いが、Fröbel の宗教教育との関連で自己活動論を見ておきたい。『人間の教育』では、イエスを人類最高の、完全な模範人と見ている。彼は、自己の地上への出現とその生命の源泉を自覚した人間であり、永遠の法則に従い、生き続け、創造し続ける神から自発的に現れ出た人間なのである。人間は、このイエスを模範として自由と自己の決断と自主的な選択によって主体的に活動することが要求されている。そうした生き方を自ら選択するように援助するのが教育・教訓の任務であり、目標であると Fröbel は言うのである。

以上の教育的前提をもって次の教育の方法が提示される。

「かくて、良き教育・真なる教授。真なる教訓においては、必然性は自由を、規律は自主的決断を呼び出されなければならない。外からの強制は内心の自由な意志を、外からの憎悪は内心の愛を呼びさまさなければならない。憎悪が憎悪を生み、規律が詐欺と犯罪とを、強制が奴隷根性を、必然性が隷属を生む所、圧迫が滅し、賤しくし、重荷が破壊し、卑賤たらしめる所、厳格と冷酷とが反抗と虚偽を生む所、そこではことごとくの教育が即ち教育、教訓及び教授のことごとくの作用が否定される。このような事態をさげ、良い真実な教育を達成するためには、命令的に現れてくるものはすべて追隨的に作用しなければならないのである」⁽³⁷⁾。

そもそも人間は、人類以前の発達形成を自己のうちに経過し、その道筋は模造・模倣・模写ではなくて、自己活動的、自発的形成において為

なされるべきである、と言うのである。その根拠として Fröbel は、人間にイエスからの教訓と使命の認識を促す。

すなわち、「汝の精神的な本質、したがって汝の中に生きているもの、汝の生命を純粹に外的なものにおいて、また、外的なものを通じて行為に表現せよ。そして、汝の本質が何を要求し、いかなる性質であるか⁽³⁹⁾」を知る必要がある、と述べる。

要約すると、神に類似した存在として創造されている人間であるからこそ、自由で、自己自身の活動を要求する。従って、教育は受動的、追隨的であるべきで、命令的、規定的、干渉的な態度は排除される。つまり、第一に、この自己活動には宗教的前提が存在している。

第二に、上記の Fröbel 人間学には、時代に先駆けて系統発生的思想が含まれている。同時に、それは決して生物学的人間観に止まらず、自己活動的に、自己創造的に発達形成される存在として人間を理解している。その理由もまた、神性の付与された、精神的存在と人間を見るところからスタートしていることが分かる。

2) 創造的自己活動

長田は、こうした Fröbel の根本的な人間理解や教育精神から出た自己活動論を重視して彼の種々の著作でそれを展開している。

『教育学』(昭和8)では、Fröbel の自己活動を、感性与精神との弁証法的発展に対する意図的助成作用であり、動物的本質である感性与神的本質の精神の統一したものと捕らえる。また、それは、理性の自然化と自然の理性化の必要 (F.Schreiermacher の説から引用)、言葉を変えれば理性と自然の総合において自己を変容し、自己の心理契機を保有すること、そして、生活の中に理念を実現化する営みであると表現している⁽⁴⁰⁾。

一方、『近世西洋教育史』においては、自己活動は児童のためのみならず、児童により児童を通じて企図されるべき仕事であって、教育活動の中心は内面の自己発展であるとする⁽⁴¹⁾。

『教育活動の本質』(昭和11)では、一層体系的にこの創造的自己活動論が展開されている。

これは第一篇が哲学と教育学で、その第一章は、「全体観の教育学」である。そこでは長田の持論である、「教育活動は直接生命ある若しくは自

ら文化価値を同化して理想の世界を創造して行く精神的実在としての人間を取り扱わなくてはならない⁽⁴²⁾」,との前提が述べられている。彼にとって教育活動は、生命をもつ人間に文化価値を同化して理想社会実現の精神的存在に形成する営みなのである。

その精神的実在の人間を生命、体験、自由、創造、全体性の原理をもって説明したのが生命哲学であって、長田は主にこの立場から、教育における創造的自己活動の理論を究明するのである。

長田はこの源を G. Leibniz の单子論から説き起こす。それは、「有機体の総てはその最後に至るまで内によく有機化されて其処には機能的調和が十分現はれているもの⁽⁴³⁾」で、この論が自己活動の理論の根本にあると言うのである。事実、Leibniz は神と自然、精神と物質などを調和させ、無限の内容を含みつつ自然に活動する理論を作り上げた。これは後にドイツ古典哲学の弁証法を用意したと一般に言われているものである。

長田が、その Leibniz 理論を駆使して言うところの、「生命の本原性と創造力との充実を求め⁽⁴⁴⁾」、「児童の感覺的はそのうちに諸々の高き心意的契機を含む小宇宙⁽⁴⁵⁾」を成すこと、また、「生と精神との相対立する二つの原理から成立する独自の具体的全体である⁽⁴⁶⁾」等は、確かに、Fröbel の教育論と深いところで繋っているように見える。

3) 宗教と労働

ここで長田は、Fröbel のあの宗教と労働との命題を自己活動論に取り込んでいる。すなわち「フレーベルも言ったように労働は人間における唯一の生けるものであり、生命創造的なものである。(中略)労働に精神的内容を注ぎ込ませることである⁽⁴⁷⁾」と説いている。

Fröbel の宗教と労働論としては、かの有名な、「生産労働なき、労働なき宗教心は空虚なる迷夢、うつろな狂信、内実なき幻影となる危険に陥る。同様に、宗教心なき労働、即ち生産労働、人間を駄馬にし、機械にする。労働と宗教心とは一つの同時的なものである。」、⁽⁴⁸⁾があげられよう。これは確かに Fröbel の宗教教育観の中心の一つである労働観である。

Fröbel によれば、衣食住のためにのみ労働すると言うのは、妄想で卑しいと断定する。むしろその逆に、神の精神的な本質を認識するためにのみ創造し、労働すると考えている。真の労働時間が授業の中に導入さ

れば有益であろうとも述べる。

そこで長田は、Fröbel が言うところの労働を自由な精神をもって克服し、それを内部から支配することを提案する。労働を克服して自己のものとする所以とは、精神、理念、ロゴスの有無によるのである。彼は、Fröbel の労働と宗教の相互補完関係論を、産業革命以後の近代市民社会に当てはめて考察する。その社会では、生産機構が労働を商品化し、労働者は人格を喪失している事実がある。つまり、こうした状況は人類の終焉さえ予感させるものである。

そこで、長田は労働に宗教的な意味と価値とをを付与することに依って、「喪失せる労働者の人格を奪回し、以て世界史の危機を未然に防止しようとした」⁽⁴⁹⁾のが Fröbel である、と現代的意義を強調しているのである。

4) 西洋教育史における位置づけ

長田が教育活動に照準を当てて Fröbel を論じるその中核には、Pestalozzi の精神・心情力 (心)、知力 (頭) 技術力 (手) の調和的発達との対比がある。Pestalozzi のこの発達の理想を宗教的に深化させ、神性の顕現に教育活動の一切を見たのが Fröbel だというのである。

その意味で長田は、Fröbel 教育学を主観主義教育学の一つに数えているが、反面、これらが客観的なものを拒否したと即断すべきではないとも指摘している。⁽⁵⁰⁾Rousseau, Pestalozzi, そして Fröbel 等には、社会関係によって人間が形成されると言う見解が十分に窺われる点からも単なる観念論者の域を越えているというわけである。

また、現実の生活原理の上に精神文化が再構築されるべきことで、上記三者の人間教育観は共通しているとも言う。長田は、それら三者の思想への復帰の必要性を説くのである。⁽⁵¹⁾

さらに『新知育論』(昭和 14)においては、人間性の内面に基礎を有たない教育はすべて不可能であって、教育とは被教育者の内に秘められるものの内部からの自己発展に対する助成作用であると述べられている。⁽⁵²⁾ここで長田の内面性の自己発展理論は、Fröbel を引用しているのではないが、言わんとする所とは彼と完全に一致している。

また、『フレーベルに還れ』の著では、Fröbel は児童が自ら環境に親し

み社会関係に入る、その仕方を明らかにして、総ての教授訓練を児童の自己発展の自然の過程と調和させるために Fröbel は研究をしたのだと言う⁽⁵³⁾。そして自己活動は、精神生活の発展が内面的に基礎づけられて、初めて教育の目的が達成されるとする。さらに、この著では Fröbel の意図通りに、「天性に基づく法則に従う自由に教育活動の真の意味」がある、と表現している。

『幼児の教育』(第 50 卷)では、自己活動の理論を歴史的に解明している。そこでは、『教育活動の本質』にみるように、自己活動理論は自然科学、とくに Leibniz の单子論の教育一般、特に Fröbel にもおよび、これが徹底された結果であると言う。一方、興味深いのはこの Fröbel 没後 100 年の記念論文において、長田が、Kant と J. Herbart と比較して自己活動論を述べている部分である。そこでは、Kant を棄て「観念力学」に走った Herbart と、Kant に発するドイツロマンティックの使徒である Pestalozzi、さらに続く Fröbel との間に自己活動論に「間隔」⁽⁵⁵⁾があると指摘する。

教授段階の体系化へと進む Herbart と Fröbel との間隔とは、児童研究の動機が、児童自身の自己発展を助成するか否かにあるとする。長田はその分岐点で Fröbel を支持し、世の教師は「学習法の研究は児童を主体とする新教育学の中心課題とすること」⁽⁵⁶⁾でなければならない、と訴えかけている。

以上のように長田は、Fröbel の創造的自己活動論は、実践に裏打ちされて最高潮に達しており、それに比較して、アメリカのプロジェクト・メソッドもダルトン・プランも実験学校の試行も問題にならないと言う。その Fröbel の苦闘に充ちたカイルハウの実践の中には、「自由で思索的な自己活動的な人間」(freie, denkende, selbsttätige Menschen)⁽⁵⁷⁾を作りたい一心を見ることができる。

4. 教育敬と幼児教育

1) 何故「敬」か

児童を主体とするとは何か。長田は Fröbel の教育活動を Pestalozzi のそれと重ねて論ずる。長田は、Pestalozzi の教育も児童神性論と表現

しているが、その内容には無邪氣、愛、感謝に見ている。それに対して、Fröbel は、子供に神性を内観するものである。神の似姿である人間の子において永遠者の姿を看取ること、つまり、子供の内にある神性の所以に、子供に「敬虔の念に燃える」のがフレーベル幼児教育精神の中心と見ているのである。⁽⁵⁸⁾

長田はこの「敬」を『児童神性論』以下、何回も繰り返して用いている。人間教育の真髄は「愛」であり、「敬」でなければならないからである。つまり「愛」の代表者が Pestalozzi であり、「敬」は Fröbel の教育精神である、と言うのである。

そして、その「敬」の線上に把握した長田の Fröbel 幼児教育論を次に見たい。それによれば、Fröbel 以前にすでに、J.Comenius, Rousseau, Pestalozzi, J.Paul 等が幼児教育に深い理解を示したが、しかし、その実践に徹したのが Fröbel である。特に『母の歌と愛撫の歌』は、人間素養の発展がその初期にあることを実践例で示したものである。

また、彼の初期の著書『人間の教育』の中にすでに、最も意義あるものは「共同感情」の指摘で、それが社会感情に繋がる点にある。しかも、ここには、宗教心の萌芽、魂の教育期として幼児期を最重要視した功績が見られる。⁽⁶⁰⁾

2) 内なる神性への敬

さて、長田が上記のように評価するこの「敬」、敬う、敬虔、尊敬に該当する用語を Fröbel の文献から考えたい。

『人間の教育』では子供を次のような存在としている。・神的なもの(精神)即ち神から現れてきたものを予感し、意識する・高き生命にあふれたもの、精神的、靈的、神的な者としての幼児の存在・児童に内在する生命・子供から内的な生命を得る・幼児における純粹善良な心、思慮ある敬虔な心情・人間は善でも悪でもないとするのは、明らかに人間性に対する裏切りで、神の仕事の否定・「真実を語るように作られている存在・真の子どもらしさ、信頼の心、真に愛情をもつ敬虔な心、融和の精神、仲間や同胞に対するいたわりや尊敬の念の支配」

以上に見るように、事実、Fröbel は、「天国は子ども達のものである。というのは大人の過度の処世知や狂愚が子ども達を駄目のさえしていな

ければ、子どもは子どもらしい素朴な信頼をもって、自分たちの中に働いている形成衝動及び活動衝動に献身するからである⁽⁶¹⁾」と述べて、Pestalozzi 同様に内在する神性の特徴としての活動性や形成衝を説く。それを根拠にして Fröbel はあの有名な言葉、「子供に生きよう」(Kommt, laßt uns unsern Kindern leben!) を我々に呼びかけるわけである。

それは、大人の内的生命の欠如と空虚な生き方を克服する道として、神性を有し、創造的な生命力に満ちた子供との共生が必要であり、よって必要な生命力を得ようと Fröbel は訴えているのである。長田の言う子供への「敬」の思想はこれを意味すると考える。

しかし、この子供への「敬」の長田の発想は、フレーベル著の引用ではなく、長田独自の表現と考えられる。この「敬」に類しものは、長田著『児童神性論』の十数年後に、倉橋惣三が『フレーベル』において、「児童神性説」という語を使用している。倉橋は、「フレーベルは児童を愛し、敬重した⁽⁶²⁾」と言い、また『子ども讃歌』では、「子どもをとうとぶ語⁽⁶³⁾」を使用している。しかしここでは、Fröbel 教育に限定した叙述ではなく、子供一般に対する姿勢、思想として用いている。

長田が「敬」を説く際、引用するのが、「エマースンは教育の秘訣は児童を敬するにあり」で、「敬」こそ Fröbel 教育の「アルファーでありオメガ⁽⁶⁴⁾」なのであると言う。このことから長田の Fröbel 教育論中の「敬」は、G.Emerson『人間教育論』からの援用と考えられる⁽⁶⁵⁾。

3) 無意識の認識

一方、長田は Fröbel が B.Marenholtz-Bülow 夫人との会話で、無意識に言及している所に注目している。それは、無意識が後年の意識的生活の基礎であり、人間の統覚作用(神との統一の自覚)に繋がる論である。つまり、Fröbel の偉大さは、幼児の「知る前の感じ」、「勘(Takt)」、「予感」、「予量」など、「神秘的な感情に人間教育の基礎⁽⁶⁶⁾」を置いた見解にあると言う。

実際、Fröbel は、幼児期を混然一体の全体であり、おぼろげに予感する時期であるとし、その子供が熟慮する存在に成長することこそ児童教育の要であると言っている。また、この幼い、誕生間もない存在が「無意識だとしても、決定的にかつ確実に最善なるもの⁽⁶⁷⁾を求める」存在なのだ

とも述べている。

Fröbel は、この無意識が次第に遊びや仕事活動によって外面化され、言語の発達に伴って意識化されてくるというのである。乳飲み子はいまだ未分化で多様性のない一者である。しかしすでにおぼろげながら予感し、内在する神的なものを四肢を用いての感覚活動によって外面化し、少しずつ意識化されてくる。その際の無意識の意味は、予感 (Ahnung) に置き換えられてもよい響きがある。

乳児期から幼児期にかけての母親の役割は、意識化した子供を神の自覚への導く者として存在する。リズムカルな運動や遊びを通じて母親は深きところに眠っている生命を覚醒させ、発展させるのである。

それゆえに自己活動によって生き生きとした神への自覚、認識、神の本質に近づけて行くことが幼児教育の課題となる。幼児期も言葉と事物、身体と精神、肉体と魂の分離ができていない状態だからである。かくして幼児期の発達課題をへた少年には精神的意志的活動が現れてくる。

この期では人間性の純粋な、確固たる力強い、根気強い意志の形成が少年の目標となるというのである。なお長田の Fröbel 論では上記の「予感」、すなわち Fröbel の乳幼児教育の核をなすものへの言及も注目に値する。

この Fröbel の言う無意識への言及は、後年、心理学や精神分析学発展によって、R.Steiner, S.Freud, C.Jung 等によって解析されるが、長田もこれに注目した一人である。

5. Fröbel 研究の意義

1) 倉橋惣三との比較

明治から大正にかけて倉橋等の努力によって一面的、形式的 Fröbel 教育法が克服されるという状況を背景に、長田は、Fröbel 教育学の根本思想を再認識する役割を担ったことにある。

我が国の明治期、Fröbel 教育学は主として幼児教育中心に理解され、実践されて来た経緯を省みて、長田はその幼児教育も、全体として言えば、人間教育の一段階にあり、幼児教育をして Fröbel の中心的な思想や実践とするのを間違い、と言い切る。それには、彼が頻繁に使用する人

間教育は「全体観」を把握するべきという考えが、Fröbel 研究についても確固として貫徹しているためである

さて、今一度、倉橋惣三と長田の相違を考察したい。倉橋は学際的な研究と東京高等女子師範学校付属幼稚園主事の立場で現場の実践に携わり、その相互体験により明治期の実践現場を占めていた形式的な恩物教育法の改善に着手した。その際、主として米国進歩主義教育学、児童心理学の研究により、S.Hall, J.Dewey 等の Fröbel 研究とその評価も受容した。彼は Fröbel の生活教育や自己活動の主張を高く評価し、恩物教育を排除する一方、幼児の興味や自主活動中心のカリキュラムを作成し、幼児教育法の近代化に大きく貢献した。

また、Fröbel に関する数多くの研究著書の他、翻訳では「フレーベル自伝」(大正 3) や「ビューロー夫人の追想録」(大正 4) を『幼児教育』誌にそれぞれ 12 回も連載する等、多大の功績を遺している。

今、長田と倉橋の相違といえば、Fröbel の哲学や思想の評価にあると考える。倉橋も Fröbel 教育について、神性の所有者としての子供に一番奥の特質を認めつつも、その人格の働きの善性については、「絶対的樂觀主義」と、批判している。そして、あの Fröbel 思想は、「象徴主義」、「神秘主義」の哲学に依拠するもので、単に彼自身の嗜好であって真の心ではない、と考える。倉橋にとって、『人間の教育』への関わりは、「神性的児童観から出発したが実生活の現実観に終わらせた」書であり、その真価値は、「自然と人生との生命に活きている真現実⁽⁶⁹⁾」にこそあるとする。

一方、長田も大正新教育思想に立ち、成城小学校設立時には沢柳柳太郎の助力者であったが、Fröbel 教育観では倉橋とは異なる見地に立った。すでに述べたように、長田は倉橋が「象徴癖」と退けた Fröbel の思想に逆に真髓を見て取っている。Fröbel は、宗教的な感情に人間教育の基礎を置いたとの長田の見解は、すでに述べたとうりである。とすれば、「さながらの生活」実際に、極端に教育の真値を置く倉橋の Fröbel 教育観、しかも、その生活の理念を問わない点で、Fröbel の意図からの逸脱ではないかとの疑問が長田同様起きてくる。

倉橋と長田の相違は主として、実用主義的なアメリカ児童心理学研究とドイツ教育哲学史への依拠という専門性の差異があるろう。

だが、より以上に長田は、原罪論に捕らわれない自由な宗教論者として、言わば「罪のない子供を初めて罪あるものにする⁽⁷⁰⁾」ような、今日の教育状況に慨嘆していたからに相違ない。

そして長田の内奥では、西欧宗教哲学や Pestalozzi 研究によって、人間教育における宗教的、精神的教育の重要性を認識していたこと、また、Pestalozzi の『隠者の夕暮』のような、身近かな存在として神を感得していたに違いない。そこへの道程には長田の師である小西重直が、Pestalozzi の教育主義を宗教即道徳とし、そして Fröbel を教育上の殉教者に位置付けた事の影響も大きいであろう。⁽⁷¹⁾

2) 後藤真造、小川正行の Fröbel 研究

昭和前期には、後藤真造や小川正行がかつてなく精力的な Fröbel 研究を展開する。それは、後藤が『教育者としてのフレーベル』(昭和5)、小川が『フレーベルの生涯と教育思想』(昭和7)を著し、Fröbel の生涯と教育思想、実践の全体像を明らかにしたことによる。

後藤の著は、主に英文を底本に幼児、児童教育家としての Fröbel 像を『人間の教育』等から解きほぐす。彼はアメリカ進歩主義教育学の影響を受けつつも倉橋の捨象した恩物やその教育法には熱意をもって解説している。長田はこの著の出版を、「フレーベル、ルネッサンスへの烽火」(序)と祝う。また、小川の著は、徹底した独語文献、しかも当代最新のドイツでの研究成果に依って記述され、Fröbel 教育全般にわたる浩瀚な業績である。そこには、キンダーガルテン (Kindergarten) の設立事情、その禁令 (Kindegatenverbot) 等についての事情究明等は、今日の研究段階と比較しても引けを取らずに正確である。例えば禁令の理由としては、甥の Karl Fröbel との誤認などではなく、「フレーベルの急進思想への弾圧⁽⁷²⁾」にあるとしている。それと言うのもこれは、当代ドイツにおける Fröbel 研究の先端を行っていた J.Prüfer, F.Halfter, H.Schumacher 等の文献を駆使して論じているからである。⁽⁷³⁾

この禁令については、長田は、後藤の著書同様に、それまで一般に認識されていたようなプロイセン当局の甥と Friedrich Fröbel 当人との「混同」、「誤解」説に止まっている⁽⁷⁴⁾。だが、小川の著は、Fröbel の根本教育思想や教授学は詳細だが、一方キンダーガルテン教育の記述等は相対

的に少ない。また、ここで重視したいのは、小川も倉橋と同様に、Fröbel 教育観の論述において、万有在神論の確信者たる Fröbel は、「独断的楽天主思想」家であり、自然即善の独断説という誤解者である⁽⁷⁶⁾、と批判している点である。それ故に、小川は、Fröbel の宗教的信念よりも実際生活に適合する自己活動を重視する、という立場を取っているのである。

さてこの点、長田の把握は如何なるものであろうか。その際、考慮しておかなければならないのは、我が国の大正デモクラシー期において、児童中心主義が高唱されるさ中、恩物の排除のみならず、Fröbel 思想は洪解、難解であるとの烙印が押された事実である。さらに、上記に見るように、多くの研究者が、児童神性観等は楽天主義、誤解であるとの強力な見解を打ち出していた。よって幼児教育界を風靡していた形骸化した恩物教育法もろともに、Fröbel の根本思想までもが後方に押しやられてしまった経緯がある。

長田の場合、Fröbel への象徴主義や主観主義という批判を十分に知りつつ、なお、「フレーベル教育学の移植が我が国の教育に対して深き意味を有つてであろう」との「⁽⁷⁶⁾予言」を發した。それというのも、長田は、歴史的課題に対する教育思想の構築、歴史の創造に際して Fröbel の創造的自己活動の再生を特に必要と考えたことによる。すなわち、Fröbel と同様に、長田もまた、人間は神と同様に創造し、活動すべきであるとの主張を自己活動の根拠として理解していたからである。

3) Pestalozzi と Fröbel の比較

長田の最も大きな特徴は、すでに見たように、Pestalozzi との対比でフレーベル教育観を鮮明化した点にある。

彼は Pestalozzi の母性による「愛」と「信頼」からスタートし、Fröbel の神性観と「敬」の姿勢こそが児童の教育の根幹にあるべきことを明らかにした功績である。その際長田は、「独善的宗教の解放者」としてその両者に共感するところが基点となっている。そこには、とりもなおさず、Pestalozzi や Fröbel の教育観への深い共鳴がある。

長田は Fröbel を Pestalozzi が達成した教育を独逸理想主義哲学をもって基礎づけた人間として Fröbel を捉えていた。長田自身が「畢生の研究」という Pestalozzi 教育学にアイデンティティを感じつつ、

Fröbel 思想を読み取っていた事実である。

併せて、『近世西洋教育史』では、18-19 世紀、すなわち哲学と教育の世紀に出現した以下の人物を、長田は次のように端的に表象している。

J.Rousseau は人間教化へ道の「予言者」、Pestalozzi は「教育学の理論的基礎としての理想主義」に立つ「体験者」、そして Fröbel はその体験を「思弁的な形而上学的な宗教的理想主義」によって、「独逸浪漫主義の哲学の深みに持ち来って新たな試練を加へた者」⁽⁷⁷⁾、との定義を試みた。他方、Pestalozzi は、知識の基礎として現実の事物を使用し、生産活動、直感、模倣、再生を教授の主な理論とした。これに対して Fröbel は感覚や情緒の陶冶を、生産的な自己活動、創造を知識の基礎にしている。

長田は、Fröbel 思想を Pestalozzi の他、Paul Natorp, Theodor Litt, E.Spranger 等、生命・文化教育学への共鳴によって、Fröbel を彼等と比較し、その視点で分析している。

長田は、T.Litt の研究によって、生命と理念、実証主義と理想主義、内面の可能性の発展などの生命哲学を自身の教育思想に取り込んでいる。さらに、Spranger にも研究を進め、Natorp や Litt 等に流れる生命、文化教育学の本質と物質、宗教を実教育の関心に言及している。これが Fröbel 理解に当たっての長田の重要な視点となっている。

この思想や視点に立って、長田教育論の全体像が確立されている。それは、方法は理念によって生かされるという理念重視の確信である。世界観による教育理念の重視こそが今日の教育に欠如しているものであり、Fröbel 教育学は、その「雄姿の新たに驚異の目を見張」⁽⁷⁸⁾ると、彼には映ったのである。

今後の課題

1) 宗教教育論、まとめ

以上、長田のフレーベル教育論への関心の中心は、やはり、宗教教育論であり、児童神性観である。であるから、それは、小川たちのような Fröbel の全体的で、細部にわたる教育の思想、理論、実践、運動の研究とは言いがたい。むしろ思想史研究、啓発活動に集中していると言えよう。それは、Fröbel が宗教教育について以下のように述べていることと

も一致している。

「固有の精神的自我,即ち人間の精神が根源において神と一致したものであるということの予感を明瞭な自覚にまで高め、この自覚に基いて神と和合し、生活のそれぞれの状態及びそれぞれの関係においてこの神との和合の心で清らかに強く生き抜いていこうとする努力、これが宗教である。」⁽⁷⁹⁾ 長田もこうした教育観に最大の教育価値を見出ししていたからに相違ない。

かくして奥深い宗教の立脚点から得た長田の確信は、さらに現代的な課題の解決の思想として再現される。

長田曰く、それは理念なき実証主義、功利主義、軍国主義から脱却し、魂の教育を重視し、人類文化と人類教育の「殉教の士」となった Fröbel を回想し、新しい教育の創造の訴えである。それはあたかも、Fröbel の「1836 年は生命の革新を要求する」(Erinnerung des Lebens fordert das neue Jahr 1836) を想起させる程の迫力である。

Fröbel の神性啓培観、すなわち宗教教育論は、長田のみならず、我々にとっても、今日の人間精神喪失の時代には、実に、真の教育、歴史の再生と創造のために必要な教育的呼びかけと言えないだろうか。

長田の引用する「境遇は人を作る」、しかも、「人はまた境遇を作る」⁽⁸⁰⁾ という歴史創造者としての人間の使命観は、元はといえば、Pestalozzi の思想へと選っていくことになる。

すなわち長田の宗教論、そして歴史への使命観は、『ペスタロッチ教育学』(昭和 9)、『ペスタロッチー』(昭和 11)、『ペスタロッチー傳』上下(昭和 26)、そしてついに、翻訳『ペスタロッチー全集』全 13 巻(昭和 34-35)等の膨大な研究成果に収斂されていったと考えられる。

2) 生活が陶冶する

長田は『道徳教育の根本問題』(昭和 33)において、キリストの愛、釈迦の慈悲、孔子の仁、Kant の人格も人類の消滅する戦争を排除し、平和を守ることを訴えていると言う。戦後の長田編・著の『恒久平和論』(昭和 23)においては、Kant の『恒久平和のために』などを解き明かし、人格の絶対尊厳の確立に向かつての平和論が展開されている。そこでは、『児童は人間として尊ばれる』(『児童憲章』)が教育の根本精神でなけれ

ばならないし、「敬」の対象として子供を理解すべきこと、が切々と語られる⁽⁸¹⁾。

また、宗教と道德教育の根本を愛と感謝と信頼と従順の精神と考える長田は、それを教科として上から教える特設道德の拒否する。Pestalozziも『ゲルトルートは如何にしてその子を教えるか』において、家庭、学校、社会生活そのもののなかで宗教や道德を内面化し、身につけさせたではないか、と力説する。これはまさしく、Pestalozziの「生活が陶冶する」(Das Leben bildet)の教育論と同様である。

ここには師と仰ぐ沢柳政太郎の修身教授廃止論の継承をも窺うことができる。

3) 荘司雅子に受け継がれたもの

そういうわけで、明治・大正・昭和にかけての我が国における Fröbel 教育学の受容、あるいは導入史の研究は、その時々々の教育事情に左右され、紆余曲折を辿りながら進められて来た。その特徴は本稿でも触れて来たが、長田新の直弟子である荘司雅子の研究に至ってようやく Fröbel 教育学の全貌が究明されたと言ってよいだろう。

その荘司が長田に出会ったのは広島文理大学入学直後の昭和10年である。定期的に催される「長田会」で恩師長田の教育講話に感銘し、なかでも荘司生涯の研究と決心さしめたのが「教育即宗教論と児童神性論」であった。しかも彼女の問題意識は、「明治以来の幼稚園や幼児保育の歴史を見ると、彼の思想が皮相なものにされたり歪められたりしている」のに気がつき、「フレーベル思想を正しく把握して吾が国の教育」を培うことに向かわせたという訳である⁽⁸²⁾。

以来荘司は、『フレーベルの教育学』(昭和19)を皮切りに、『フレーベル研究』(1953)等の著作を次々と発表した。それらは、長田の研究法や思想を継承して、西洋哲学史をバックにした Fröbel 教育哲学、特に宗教教育論であった。そしてついに藤井敏彦などの援助をもって『フレーベル全集』(全五巻)(昭和56)を W.Lanngge 編から翻訳し、『フレーベル事典』(1996)も刊行するに至ったのである。

(1998年度北星学園大学特別研究費による研究)

〔註〕

- (1) 長田新『宗教と教育』序文 P 2 1954
- (2) 宗像誠也編『教育基本法』 P 78 昭和 41
- (3) 長田新『原爆の子』序 昭和 26
- (4) 長田新『道徳及宗教教育の本質』P 4 昭和 14
- (5) 長田新『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』P 103 大正 14
- (6) 同上 P 105
- (7) 長田新『宗教と教育』P 89 1954 独文はペスタロッチ著の“Abendstunde eines Einsiedlers” (1780), 梅根悟, 勝田守一監修, 梅根悟訳『政治と教育』所収の付録から引用した。P 174 1965
- (8) 長田新『道徳及宗教活動の本質』P 56 1954
- (9) 同上 P 10-11 (10) 同上 P 39
- (11) J.H.Pestalozzi, “Lienhard und Gertrud” (1781)からの引用
長田新『道徳及宗教活動の本質』P 11 昭和 14
- (12) 同上
- (13) 同上 P 12 (14) 同上 P 17
- (15) 梅根悟, 勝田守一 監修 前掲書 P 191
- (16) 長田新『道徳及宗教活動の本質』P 26 昭和 26
- (17) 長田新『宗教と教育』P 165-166 1954
- (18) 同上 P 20 (19) 同上 P 172
- (20) 長田新『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』P 66 大正 14
- (21) Friedrich Fröbel, “Menschenerziehung” (1826)の一部を長田新が訳し, 論説を付加して『児童神性論』とした。P 29 大正 13
- (22) 長田新『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』P 131 大正 14
- (23) Eduard Spranger, “Aus Friedrich Fröbels Gedankenwelt” (1953)
小笠原道雄・鳥光身美緒子訳『フレーベルの思想界より』P 38 1983
- (24) F.Fröbel, “Menschenerziehung” 1826
長田新編・訳『児童神性論』P 17 大正 13
- (25) 同上 P 18 (26) 同上 P 13-14 (27) 同上 P 6 (28) 同上
P 3-8
- (29) 長田新「フレーベル教育学の根本問題——いざや吾等を吾等が児童に生きしめよ(フレーベル)——『幼児の教育』50巻 P 18 昭和 26
- (30) F.Fröbel, “Menschenerziehung” 長田新編・訳 前掲書 P 19
- (31) 同上 P 16 (32) 同上 P 20 (33) 同上 P 29 (34) 同上
P 28

- (35) F.Fröbel, “Menschenserziehung” 岩崎次男訳, 『人間の教育』 I
P 43 1966
- (36) 同上 P 13
- (37) この自伝とは, “Aus einem Briefe an den Georg von Meiningen”
と “Aus einem Briefe an K.Chr.Fr.Krause” (1828)の書簡からなる。
長田は, これを前後 3 回に渡って翻訳出版している。その第一は, E.
Michaelis の英訳から翻訳し, 雑誌『渾沌』に掲載 (大正 13) した。
第二は, 『フレーベル自傳』(昭和 12)で, これは W.Lange 編からの翻
訳, 第三は, 前記の改訂版『フレーベル自傳』(昭和 24)である。な
お, 倉橋惣三もこの自伝の翻訳を『幼児教育』14 巻 (大正 3) 12 回の
連続で掲載している。
- (38) Fröbel, “Menschenerziehung” 岩崎次男訳 前掲書 P 19-20
- (39) 同上 P 21
- (40) 長田新 『教育学』 P 110 昭和 8
- (41) 長田新 『近世西洋教育史』 P 162-163 昭和 11
- (42) 長田新 『教育活動の本質』 P 1 昭和 11
- (43) 同上 P 35 (44) 同上 P 5 (45) 同上 P 33 (46) 同上
P 40 (47) 同上 P 82
- (48) Fröbel, “Menschenerziehung” 岩崎次男訳 前掲書 P 40
- (49) 長田新 『幼児の教育』前掲論文 P 19
- (50) 長田新 『教育活動の本質』 P 121
- (51) 同上 P 212
- (52) 長田新 『新知育論』 P 73 昭和 14
- (53) 長田新 『フレーベルに還れ』 P 96-97 昭和 30
- (54) 同上 P 99
- (55) 長田新 『幼児教育論』前掲論文 P 14
- (56) 同上 P 13
- (57) Fröbel, Aus einem an Karl Christoph Kruse: Herg.W.Lange,
Friedrich Fröbel’s gesammelte pädagogische Schriften Abt1 Bd.1
S 137 長田新訳 『フレーベル自傳』 P 178 1949
- (58) 長田新 『道德及宗教教育の本質』 P 84
- (59) 長田新 『幼児教育論』前掲論文 P 13
- (60) 長田新 『近世西洋教育史』 P 172
- (61) Fröbel, “Menschenerziehung” 岩崎次男訳 前掲書 P 37
- (62) 倉橋惣三 『フレーベル』 『倉橋惣三選集』第一巻所収 P 335 昭和 14

- (63) 倉橋惣三『子供讃歌』『倉橋惣三選集』第一巻所収 P 296 昭和 29
- (64) 長田新『児童神性論』P 14
- (65) G.Emerson,“The complete works of Ralph Waldo Emaeson”
(Education) 市村尚久訳 P 24-25
- (66) 長田新『フレーベルに還れ』P 109
- (67) Fröbel,“Menschenerziehung” 岩崎次男訳 前掲書 P 14
無意識から意識化への発達についてフレーベルは、次のように説明している。「乳児時代に目覚められた共同感情から、衝動や性向が幼児時代に発達する。これが、心情の形成に導く。そしてこの心情の形成から精神的意志的活動が少年期に現れる。」同上 P 89
- (68) 倉橋惣三『フレーベル』前掲書 P 335
- (69) 同上 P 355-357
- (70) Fröbel,“Menschenerziehung” 岩崎次男 前掲書 P 114
- (71) 長田は沢柳政太郎を父、小西重直を母的存在と称している。明治 39 年、長田は広島高等師範学校で小西重直から教育学概論を教授される。この頃、『人間の教育』を読んで感動している。また、京都大学で再び小西から思想や研究法、研究者としての教訓を得ている。ここで引用した小西の著書は『教育思想の研究』(大正 12)である。
- (72) 小川正行『フレーベルの生涯と教育思想』P 148 昭和 7
- (73) この禁令の事情は以下の文献等から考察されている。
Johannes Prüfer,“Friedrich Fröbel” 1920
Fritz Halfter,“Friedrich Fröbel, Der Werdegang eines Mensch-
heiterziehung” 1931 Henny Schmacher, “Friedrich Fröbels Idee
in Lichte der Gegenwart” 1923
- (74) 長田新『フレーベルに還れ』P 68
- (75) 小川正行 前掲書 P 362
- (76) 長田新『フレーベル自傳』序 昭和 12
- (77) 長田新『近世西洋教育史』P 155-156
- (78) 長田新『児童神性論』P 23-24
- (79) Fröbel,“Menschenerziehung” 岩崎次男 前掲書 P 131
- (80) 長田新『ナトルプに於けるペスタロッチの新生』P 106
- (81) 長田新『道徳教育の根本問題』P 14-17 昭和 33
- (82) 荘司雅子『フレーベルの教育学』序 昭和 19